



さとのかぜ

No.175号

千葉県いすみ環境と文化のさと

2011年4月1日発行

編集・発行 千葉県いすみ環境と文化のさとセンター

指定管理者 (財) 千葉県環境財団

〒298-0111 千葉県いすみ市万木 2050 番地

TEL 0470-86-5251 FAX 0470-86-5252

URL <http://www.isumi-sato.com/>



畦(くろ)塗り

畦(くろ)塗りは、田植前1ヶ月～2ヶ月前に行われる作業です。練った田んぼの土を鍬(くわ)で、田んぼの畦(くろ)に塗り付け、ひび割れ、モグラ、ザリガニやオケラが開けた穴からの水漏れを防ぎます。水が漏れると水管理が困難になり、稲の生産に大きな影響を与えます。

最近ではトラクターによる畦塗りが行われ、鍬での畦塗りは見かけなくなりました。場所によっては畔をコンクリートで作ったり、ビニールシートで覆っているところもあります。

水田よもやま話～道具事情と水事情～

表紙に続いて田にまつわるお話をいくつか…。

くろ塗りをする時、鍬(くわ)持ってこいと言われて、持っていくと「そんじゃ てえらに ぬらんねえーよ！」とオダされる(怒られる)のは下の写真のどちらでしょうか。



答えは左の鍬です。くろ塗りは、畦に土を平に塗るため、鍬の背は平らで柄が突き出していないものを使用します。左の鍬は、ホームセンターで売っているような大量生産品です。右の鍬は、職員の私物で50年以上昔から使用しているものです。刃先が減る度に鍛冶屋で打ち直してもらっているそうです。その職員曰く、農業といえば稲作という土地柄、左の鍬はあまり見たことが無いそうです(しかし、なぜかセンターの鍬は左側タイプが多く水田担当者は渋い顔です)。



くろ塗りに使う鍬は柄が短く、角度がついた物を使います。上記写真は、奥がセンターにある柄のつき出していない鍬です。柄が長く、角度も緩いです。この角度や柄の長さは田の土の性質によっても変わります。旧夷隅町のような粘土質の場合は手前の形が良く、砂地の場合は奥(柄が長く、角度が緩い)の鍬が良いそうです。

また最近の鍬は、金属板部分が細身で短く、面積が小さくなっています。大きいほうが一度にたくさん土をすくいあげ、畦に塗り付けるのに良いそうです。とは言え、最近鍬を使ってくろ塗りをする農家は少なく、鍬を使ってくろ塗りをを行う農家は、祖父から父へ、父から息子へと代々受け継がれてきた道具を持っているので、新しく買う必要も無いのかもしれないね。

続きまして『我田引水おいねえーよ』な話です。



さて、上記写真はセンター周辺の水田ではよく見る風景ですが、何をしている写真でしょうか。

こちらは田に水を入れているところなのですが、その水の入れ方が独特です。センター周辺の地区では、田に水を入れるのは各田の持ち主ではなく、水番という人が水を入れます。この水番は各地区(用水組合や工区といったグループ)ごとにいます。そして、田に水が欲しいと思った人は、自分の田に旗を立てると水番が水を入れてくれるという約束事になっています。

水番は毎日田のチェックをし、水が足りない田にはそっと水を入れてくれるような面倒見の良い人もいます(地区、水番の性格によりその辺りはまちまちだそうです)。

勝手に、つまり「我田引水」なんてしようものなら「二度と水やんねえーぞ！」と叱られてしまいます(重ねて言いますが、地区・水番の性格によります)。



肥料袋の土嚢で水をせき止め田に水を入れる

この水番が水を入れるという仕組みは、同じいすみ市でも無いところもあります。近くの茂原市では、水番は居ても水は各自で入れるそうです。地域により変わる水事情。調査してみるのも面白そうです。

ある地区では、水を落とす(堰から流す)日には目印に鯉のぼりがあるそうです。鯉のぼりがあった日、水が欲しい田は旗を立てると、水番が水を入れてくれるそうです。電話でもメールでもなく、お知らせは鯉のぼり…のどかで素敵な風景ですね。今年はずいぶん、その風景を見に行きたいと思っています。

センターの畑(昨秋～春先にかけて)

昨秋に植付した野菜は、害虫による葉の食害や根切りにあいなながらも、たくましく生長してくれました。その野菜も旬を過ぎ、子孫を残す為の作業に入ったようで綺麗な花を咲かせています。中には結実しているものもあります。下の写真は食用ナバナとブロッコリーです。

食用ナバナの花は菜の花と似ているので馴染みがあると思いますが、ブロッコリーの花はなかなか見る機会が少ないと思います、こじんまりとした愛らしい花です。野菜の花とはいえ綺麗ですよ。



食用ナバナ

ブロッコリー

11月に植付したサヤエンドウとそら豆も無事越冬し日々成長しています。とにかくセンターの冬は寒いのです。5cm超の霜柱はしばしば発生します。霜柱が発生すると根が十分張っていないものは、根が浮き上がり成長が阻害されます。そこで、根元に籾がらを蒔き霜柱が発生しないようにしました。もみ殻の層は適度な空気を含み保温の役目をしてくれます(羽毛布団の羽毛と同じですかね)。



籾がらを敷いたソラマメ(左)とサヤエンドウ(右)

サヤエンドウはつるが伸びるので誘引と霜よけを兼ねて笹付きの竹で支柱を立てました。4月から5月にかけてサヤエンドウは紫の花を、そら豆は白い花を咲かせます。観賞用の花とは違った趣がありますよ。



サヤエンドウの誘引

春先から初夏にかけての植付野菜のつとめとして、ジャガイモの植付を3月3日に行いました。芽が0.5～1cm位まで伸び植え頃になったので種の大きいものは1つを2～3つに切り、腐らないよう切り口に藁を燃やした灰を付け植えました。雛祭りを過ぎたというのに寒波の襲来で植付2日後の畝は霜柱で覆われてしまいました。イベントとしてのジャガイモ掘りが予定されているので“霜柱で芽が腐り発芽しなかったらどうしよう”と心配しています。



灰をつけた種イモ

季節外れの霜柱

今年新たに栽培に挑戦するものに、落花生と赤ジソがあります。

落花生は夏に地上で黄色の花が咲き、受粉後に子房と花托との間が伸びて地中に潜りこみ実をつける珍しい果菜です。花の咲く時期にブログで紹介しますので是非見に来て下さい。

赤ジソは10月8日に開催予定の「草木染め体験」にて、染料として使用するために栽培します。赤ジソそのものの色になるのか、はたまた別の色に染まるのか…ぜひ行事に参加して確かめて下さい。

その他、今後の植付予定は下記の表の通りです。収穫体験はもちろんのこと、生長観察にもいらして下さい。お待ちしております。

●春先から初夏にかけての植付予定

作物名	植付時期	目的、用途等
ジャガイモ	3月上旬	イモ掘り体験
里芋	4月中旬	生長観察
サツマイモ	5月中旬	イモ掘り・焼き芋体験
トマト・ナス他	5月中旬	生長観察・収穫体験
落花生	5月中旬	生長観察
綿	5月中旬	リース、綿採取等
胡麻	6月中旬	生長観察・搾油
赤ジソ	6月中旬	草木染め
ネギ	6月中旬	イベント用食材

鳥の話題 ④

●初冬から初春に見られた鳥

この頃は冬鳥が多く見られます。コハクチョウが最近いすみ市内に毎年飛来していません。

万木堰にはマガモ、コガモに加えてホシハジロ、キンクロハジロが12月中旬から見られました。また、アカハラ、シロハラは12月上旬からセンター施設周辺で見られます。林の中やその周辺で木の実やミミズなどを食べます。そのほかの冬鳥ではカシラダカが12月上旬からセンター施設北側の草はらに群れをなしています。ホオジロの仲間では短い冠羽があります。

マヒワが1月下旬に湿性生態園付近の木に止まっていた。マヒワはカワラヒワより小さく雄は頭が黒く、背なかは緑がかった色で、たてのはん点があります。



トラツグミは林の中や周辺でミミズなどをとっていますが運よく樹上に止まっているのを撮影出来ました。トラツグミは全長が約30センチでツグミより大きめの鳥です。黄色い体に黒いはん点が散らばっているのが特徴です。



ウソが2月上旬に1日だけでしたが見られました。湿性生態園付近の樹上で木の実を食べていました。



ウソの雄はほおが赤くフィーという口笛のような細かい声に特徴があります。

3月上旬にはウグイスのさえずり(ホーホケキョ)が万木堰周辺のやぶで聞こえます。また、トンボの沼ではホオジロがさえずっていました。

特別な出来事としては2月中旬にはチョウゲンボウがツグミを捕食しているシーンを撮影出来ました。



●初冬から初春にかけて確認された野鳥(トンボの沼、夷隅川河口なども含む)

アオサギ、アオジ、アカハラ、イソシギ、イソヒヨドリ、ウグイス、ウソ、ウミウ、ウミネコ、エナガ、オオバン、オオタカ、オカヨシガモ、オシドリ、オナガガモ、カイツブリ、カケス、カシラダカ、カルガモ、カワアイサ、カワウ、カワセミ、カワラヒワ、カンムリカイツブリ、キセキレイ、キジ、キジバト、キンクロハジロ、クサシギ、コガモ、コゲラ、コサギ、コジュケイ、コハクチョウ、シジュウカラ、シメ、ジョウビタキ、シロハラ、スズメ、セグロカモメ、セグロセキレイ、ダイサギ、タシギ、チョウゲンボウ、ツグミ、トビ、トラツグミ、ノスリ、ハクセキレイ、ハシビロガモ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、ヒドリガモ、ヒヨドリ、ビンズイ、ホオジロ、ホオジロガモ、ホシハジロ、マガモ、マヒワ、ミサゴ、ムクドリ、メジロ、モズ、ヤマガラ、ルリビタキ(66種類)

■夷隅川流域よもやま話—その4・地下資源と上水道—

「嫁に行くなら井戸を見てから行け」と、昔は言われていたといいます。

昭和前半のころは、いすみのとある地域では、つるべのついた共同井戸(車井戸)があり、数軒でひとつの井戸を使い、年に一度お盆前などに共同で井戸掃除を行っていたようです。汲み上げた水は、バケツ二つを天秤棒でかついで自宅の水がめに運ぶという生活をしていました。

房総半島には水を取ることができる大きな川がない代わりに、井戸水が多く使われてきました。今回は、流域周辺の地下資源と上水道整備の話です。

・地下資源 一天然ガスとヨード

夷隅川流域とその北側、上総層群と呼ばれる地質の地域では、地下資源として豊富な天然ガスと、かん水から生産するヨードが埋蔵されています。海外にエネルギーの多くを依存する日本にとっての貴重な国産エネルギーであり、石油換算にして国産の約15%が千葉県で産出されています。

天然ガスはその存在する状態によって、石油系ガス、炭田ガス、水溶性天然ガスなどに分類されますが、千葉県の天然ガスは「水溶性天然ガス」と呼ばれ、水に溶けた状態でガス田が発達しています。上総層群の地質の中に含まれる天然ガスは、メタンです。現在の生産量からすると今後約800年分が埋蔵されているといいます。一酸化炭素や公害のもととなる硫黄分等をほとんど含まない、非常にクリーンなエネルギーで、生産された天然ガスの大部分が都市ガスとして利用されています。

採集が始まったのは明治時代で、大多喜町において井戸を掘って始まりました。これが日本で初めての天然ガス事業だそうです。生成過程は、上総層群の中の有機物がバクテリアによって分解されてメタンが生成される→少しずつ地層水に溶けて濃度を増す→長い時間をかけて水溶性天然ガス鉱床を形成する、というもので、人類が出現した頃の今から300万年から40万年前に堆積した地層に含まれています。

川や田んぼで水の中からぶくぶくと泡が出ているのを見かけることがあります。この上(うわ)ガスと呼ばれるガスは、田んぼにとっては迷惑ものでガスを逃がす為の筒が立っていたり、田んぼの中に井戸のような施設を見かけることがあります。昭和の昔には簡単な施設を作りその天然ガスを集めてタンクにため、家庭用のガスとして利用している家も少なからずあったようです。台所の脇にそのためのタンクが設置してある古い家を見かけることができます。今でもそのガスを工夫して冬の暖房などに使っているという人の話を聞いたことがあります。床下にガスが溜まらないように注意しているそうです。



房総半島の表層地質図

そしてその水溶性ガス田では汲み上げた水(泡を含んだ茶褐色の塩水)―「かん水」からヨードという資源を回収することができます。

ヨードの生産については日本とチリが世界の主なヨード生産国であり、日本の生産量は世界生産量の約35%分になります。ヨードが不足すると「ヨード欠乏症」になり、甲状腺ホルモンの生産低下、発育や新陳代謝に重大な影響が生じます。世界的には不足に苦しむ人は約20億人にもなるといわれ、アジア、アフリカ、欧州などで年間数千人もの人が死亡しています。ヨードは海産物に多く含まれるため、海のないモンゴルなどでは不足していて、輸入して家畜の飼料に混ぜています。その家畜を人間が食料とすることで不足を補っています。

ヨードは、うがい薬、造影剤、殺菌剤、防かび材、工業用触媒、農業資材など各種材料の素材になっています。最近では、医療用チューブの硬さや粘りの調整、太陽電池の効率化などにも使用研究されています。ちなみ

に、昭和の昔はヨードチンキといえは消毒塗布薬としておなじみでしたが、ヨード' Jod' は独語です。英語では' iodine' [アイアダイン] です。

昭和40年代から、かん水のくみ上げによる地盤沈下が問題となり、現在では還元圧入といって、汲み上げたかん水を地下に戻しています。明治から昭和初期には海藻からヨードを採取しており、昭和10年ころからかん水によるヨード生産になりました。現在でも夷隅川流域では、田園風景の中にいくつものヨード生産の工場プラントを見ることができます。

・千葉県の水道整備小史—水の用途の多様化

千葉県の水道整備の過程をたどると、農業用水整備という目的からスタートして、工業利用・都市への供給へと用途が多様化したことがわかります。

以下に、その変遷をまとめてみます。

○1950年代…戦後の復興、食料増産の必要を受けて、農業用水の整備が進む

○1960年代(昭和35～45年代)…高度経済成長時代。都市部が人口増、千葉県営水道により東京湾沿岸都市部の給水整備が進む。さらなる水需要増により拡張工事を重ねる。水源を新たに利根川に求め、印旛沼を経由して水を導く。

○成田空港、成田・千葉ニュータウン建設による水需要増に対応して、北総地区水道事業が発足。従来の千葉県営水道は、京葉地区水道事業として区別される。

○加えて京葉臨海工業地帯の造成により、工業用水道の水源確保が必要になり、農業用水の転換利用が行われた。山倉ダム(市原市)、豊英ダム・郡ダム(君津市)が建設され、印旛沼の水が供給される。

○千葉港中央地区、茂原地区では地下水が用いられ、葛南地区、東葛地区では江戸川の水が利用される。

象徴的なのは印旛沼で、印旛沼干拓事業は当初の水害対策と農地拡大の目的からスタートしたのですが、工業用水・生活用水を供給するという比重が増えたために干拓面積を6割へと大幅に減少して、印旛沼開発事業と名称も改めることになりました。

・房総導水路—利根川の水

1943年、利根川沿岸低湿地帯の排水と九十九里地域の渇水地帯への用水を目的に「両総用水事業」が国の事業として開始しました。

1965年に佐原から茂原までの70kmの用水路が完成しました。完成に伴って国から両総土地改良区へと管理が移管されました。その規模が大きいこと・管理費用・管理技術・水利利用の効果的管理の点から、すぐに県営へと移管されました。

時代の要請から用途の多様化が図られるようになります。両総用水は、農業用水と工業用水・上水道利用との共用ということになり、農業用水は半分の量で間に合うので残り半分を売って地元負担金の返済に充てることになりました。

1969年、両総用水から取り込んだ水を長柄ダム(長柄町・85年完成)にいったん貯水して、そこから南部の工業地帯へ工業用水を、さらに九十九里地域へ上水道用水を供給するという「房総導水路計画」が立てられ、71年に着工し97年に全線約98kmが完成しました。



図のように用水・房総導水路のルートは、利根川水郷大橋近くからスタートして栗山川—横芝—東金—長柄—大多喜へとつながっています。そして大多喜浄水場から南房総広域水道用水として、夷隅川流域の水道へ、さらに南房総へと水が供給されています。

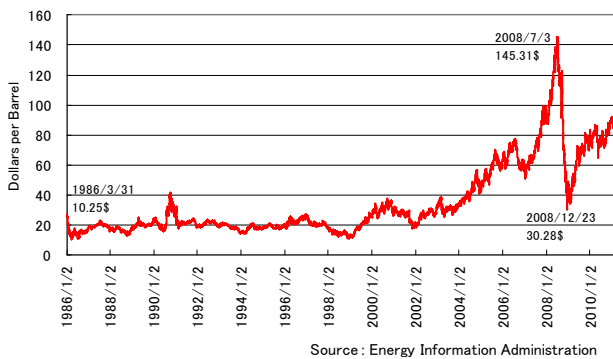
各市町の水道事業では、地域の井戸水、湧水、ダムの雨水などに房総導水路経由の利根川の河川水が加えられ、それぞれ独自にブレンドされて供給されています。

利根川は江戸時代から長い時間をかけて人工的にルートを変えた河川ですが、昭和の時代からさらに南房総へと多くの人の努力によってポンプアップして水が引かれています。

参考: 千葉県の歴史通史編 近現代3、千葉県の自然史本編2、夷隅町史、夷隅町史資料集、千葉県庁ホームページ、天然ガス協議会ホームページ

地球環境問題のいろいろ ⑥-エネルギー問題-

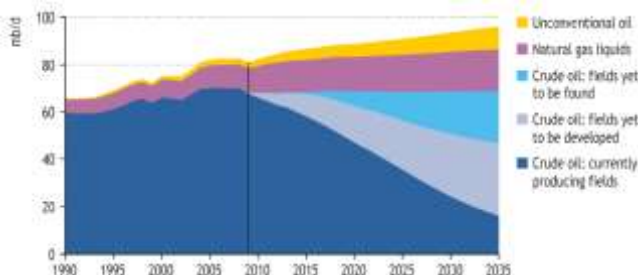
地球環境問題の大御所といえば温暖化問題。温暖化の議論に対しては脅威派、懐疑派、否定派といろいろありますが、どの立場に立っていてもこれから深刻化していくものの中にエネルギー問題があることは疑いのないところです。特に中東情勢が不安定となっている中、石油価格は上昇を続けています。



Source: Energy Information Administration

図は1986年から今年の3月初旬までの、WTI価格(ニューヨーク原油先物取引価格)の推移を示しました。1986年の3月には1バーレル(約159L)当たり10.25\$だったものが2008年の7月には145\$を超えました。いったん下がりましたが、今年の3月にはまた100\$を超えてきました。これが投機マネーによる影響だと分析されていますが、本当にそれだけが原因でしょうか。

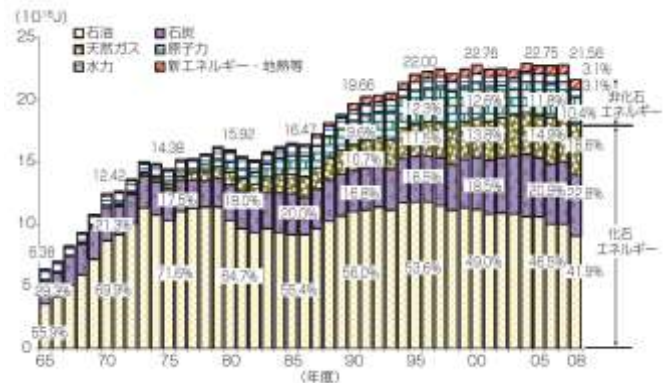
石油は昔からあと50年で枯渇すると言われ続けてきました。いつまでたっても50年ではオオカミ少年です。しかし、最近になってピークオイル説が現実味を帯びてきました。「さとのかぜ172号」でも触れましたが既存の油田の生産量は減り始めているようです(WEO2010より)。将来の需要を満たすものとして、グラフの下から現在の油田、まだ未開発の油田、まだ見つからない油田、天然ガス、オイルサンドなど、が見込まれているのです。



原油価格が上昇すれば開発コストもかけられるので、開発が難しそうなまだ手つかずのところにも手が出せるということのようです。私たちユーザーはどこまでの価格上昇に耐えて、石油を使

い続けていくのでしょうか。

次の図は日本における一次エネルギー(自然界に存在するままの形でエネルギー源として利用されているもの、電機やガソリンは二次エネルギー)の現状です。下から石油、石炭、天然ガス、原子力、水力、新エネルギーの順となっていますが、化石エネルギーは全体の83%以上あり、新エネルギーはわずか3.1%、水力と合わせた再生可能エネルギーと呼ぶものは6.2%しかありません。



バイオマスエネルギー(生物由来のエネルギー)は最近よく耳にします。海藻から油を生産するという夢のような話も現実味を帯びてきましたが、ほかにもいろいろな未利用の再生可能エネルギーがあります。太陽光、太陽熱、地熱、水力(中小)、風力、圧電、波力、海流・潮流、潮汐力、海洋温度差、温泉熱、工場等排熱、雪氷熱など…。比較的昔から日本で利用してきたものに太陽熱温水器が、最近では屋根の上に置く太陽光発電。これらは個人で実践されている方も多そうですね。

私たちの生活は今後、ますます電気に依存していくものと予想されます。上記のいろいろな未利用エネルギーを利用した小規模な発電設備を連携させ、昼も夜も、晴れの日でも雨の日でも、安定して電力を供給しようとする技術、スマートグリッドの技術も開発されてきています。だからと言って基本はやはり個々の省エネマインド。日頃の心がけや省エネ製品の積極的利用に日本の未来がありそうですね。

[出典]

1. 米エネルギー情報局ホームページ
2. World Energy Outlook 2010
3. エネルギーに関する年次報告 2010(資源エネルギー庁)

トウキョウサンショウウオに起きた大問題

センターの湿性生態園にはトウキョウサンショウウオ(サンショウウオ科)の産卵地があります。

トウキョウサンショウウオ(以下サンショウウオ)とは、群馬を除く関東地方から福島県にかけて分布する両生類です。産卵期は1月～3月のまだ寒い頃に、水辺周辺の林などから水辺に降りてきて、バナナ状の卵のうを1対水中に産卵します。成体は産卵期以外水に入らないため、姿を見る機会は通常稀です。近年生息地の土地開発等により、急激に数を減らすのではないかと危惧されています。千葉県のレッドデータブックでは、カテゴリーB 重要保護生物に指定され、環境省のレッドデータブックでは、絶滅危惧Ⅱ類(VU) 絶滅の危険が増大している種に指定されています。



そんなサンショウウオが少しでも繁殖しやすいように、センターでは湿性生態園の斜面際に水が溜まる様に溝を掘りました。この作業は、22年1月にも行っており、昨年はこの溝に100以上の卵のうが産卵されました(目視調査で54対108個)。正確な記録はありませんが、20年度の産卵は数十個であったそうなので、この溝を掘ることは産卵数を増やすのに有効な手段であると考えられます。



ところが、今年は昨年にはおこらなかった問題が起きています。それは、アライグマによる食害です。サンショウウオに対するアライグマの食害については、多くの生息地でおきている問題ですが、センターでは昨年被害にあわなかったのであまり真剣に対策を考えていませんでした。



アライグマは掘った溝の中を歩きながら、成体や卵のうを捕食しているようです。姿を確認したことはありませんが、掘った溝のそばには足跡が残されています。また、溝の中には動物が歩いた穴が残されています(水中の泥のため種までは判別できません)。



2月15日に初産卵を確認後、19日には既にアライグマの侵入が確認でき、その後多くの卵のうが食害にあいました。いくつ産卵され、いくつ食害にあったのかははっきりとは分かりませんが、昨年目視で卵のうが確認できた場所に、ひとつも卵のうが確認できないというのが現状です。

現在の対策としては、産卵された卵のうを確認後、一部網を張った場所に移すということをしています。幸い、他の産卵地のいくつかはアライグマの侵入が確認されていないので、今年は別の産卵地での成長を祈るばかりです。

今後はアライグマ対策を真剣に考えなくてはと、強く思いました。

《 行事報告 》

12月23日

米作り5・おかざりを作ろう



午前、午後2回の開催で各21名、計42名の参加がありました。定員一杯、ぎゅうぎゅうになりながらの開催でした。毎年キャンセル待ちが続出する、当センター1、2を争う人気行事です。

おかざりに使うワラは、京神(きょうしん)と呼ばれる丈の長い専用のもので、早めに刈り取った緑色のワラを使います。神事に関する縄は左縄にするそうです。

皆さん慣れない作業に四苦八苦しながらも、輪飾りを完成させました。

1月16日

そばうち体験



開催日の前日は雪が降り、当日も9時ころから風花が舞いましたが無事開催となりました。当日はキャンセルもあり大人19名の方の参加となりました。

センターの行事では初心者向けの、そば粉8に対して小麦粉2の「二八蕎麦」を打ちます。各自粉をふるい、水を回して、黙々とそばをこねます。使いたない道具を使ながらも、無事そばを作ることができました。

打ち上がったそばはその場で茹でて試食しました。少々不格好でも、皆さん自分で美味しいそばが打てたと大満足でした。

1月30日

つるでかごを作ろう



大人18名の参加がありました。センター近くのやぶに、皆でつるを採集しに行きました。あのつるはどうだ、このつるはどうだと、つるを吟味して一杯引引っ張りました。採集作業に慣れてくると、斜面を登る方も出てきて皆さん段々たくましくなっていました。

つるの編み方の説明が始まると、真剣に聞き入ります。編み始めがしっかりできていなければ、きれいなつるカゴができあがりません。基本を学んだ後は、思い思いの形のかごを作製。

自分でつるを採集しに行き、作るという作業スタイルに皆さん大変満足していただけたようです。

「第1回千葉県いすみ環境と文化のさと写真コンテスト」の開催

初めての写真コンテスト開催でどのような作品が集まるのか心配していましたが、334点の応募をいただきました。ありがとうございます。

作品の内容も、里山や里海の自然風景、祭りや農作業、植物や動物、弱肉強食の世界を撮った自然の生態など多岐にわたり、どの作品も地域の環境や生活に根ざした素晴らしいものでした。

各審査員が厳正な目で選び討論した結果、今回の入選作品を決定しました。

最優秀賞の石橋武さんの「母を信じて」は地域の伝統的な行事を撮影され、撮影位置、フレーミング、シャッターチャンスなど技術的に申し分なく、最優秀賞にふさわしい作品です。

「さとの環境部門」、「さとの生活文化部門」の優秀賞、「ファミリー部門」のファミリー賞を牧元晴美さん

が獲得しました。審査途中では撮影者名は一切見ず、作品中心に審査しました。3つの受賞作品とも、発見力、撮影方法が全く異なっており、とても同一人が撮影しているとは思えないものです。審査終了後、同一人の撮影とわかり審査員全員が驚きました。変幻自在のカメラワークに脱帽です。

穏やかで多様な夷隅地域の自然、その中ではぐくまれている人々の生活・文化を、肌で感じながら、これからも一年を通じてカメラにおさめていただければ幸いです。

平成 23 年 2 月
写真コンテスト審査員一同

2月5日

水辺の鳥の観察



大人 9 名の参加がありました。日差しもあり春めいた陽気で、野外の観察には絶好のコンディションの中、椎木堰、夷隅川河口、太東崎燈台での水鳥観察です。

椎木堰では珍しい鳥としてカワアイサ、ホオジロガモが見られました。太東崎燈台では運よく、沿岸近くを泳いでいたスナメリも観察できました。

観察会で見られた鳥は以下のとおりです。

アオサギ、アオジ、アカハラ、イソシギ、ウグイス、ウミウ、ウミネコ、オオバン、オナガガモ、カイツブリ、カルガモ、カワアイサ、カワウ、カワセミ、カワラヒワ、カンムリカイツブリ、キジ、キジバト、キンクロハジロ、クサシギ、コガモ、コゲラ、シジュウカラ、スズメ、セグロカモメ、セグロセキレイ、ダイサギ、タシギ、ツグミ、トビ、ノスリ、ハクセキレイ、ハシビロガモ、ハシブトガラス、ヒドリガモ、ヒヨドリ、ホオジロ、ホオジロガモ、ホシハジロ、マガモ、ミサゴ、ムクドリ、メジロ、モズ 44 種類。

2月19日

米作り 6・わらぞうりを作ろう



大人 16 名、小人 1 名、計 17 名の参加がありました。わらぞうり作りは、まず鼻緒作りから始まります。昔のわらぞうりの鼻緒の芯は縄でできていたのですが、現代では芯にビニールのひもを使います。ビニールひもに布を巻き付けて鼻緒の完成です。

ぞうりの本体は、通称「わらぞうり編み台」に縄をかけ、その縄にワラを編んでいきます。編み台にかけた縄がゆるんだり、編む力加減がバラバラだと、ぞうりの出来も縁が波打つような出来栄になってしまうそうです。完成したわらぞうりを見て、昔の人はこれを作って履いていたのか…と感慨深げに眺めている参加者のかたもおられました。

3月12日

花炭を作ろう



東北地方太平洋沖大地震が起きた次の日が開催日でした。行事の開催を悩んだのですが、来られる方がいる以上開催しようということになり、予定通り行事を開催しました。大人 4 名、小人 1 名、計 5 名の参加がありました。

花炭材料として準備したハス、クリのイガ、マツボックリ、トウガラシなどの他、センター雑木林で、材料拾いを行いました。ドングリ、クリのイガ、葉、小枝などに加えて、ツバキの花の花炭に挑戦しました。花びら、小枝など薄く細かいものは、間にもみがらを充填してみました。モミガラ入りは、中まで火がとおるようにじっくり焼くのが良いようです。きれいな花炭に焼き上がりました。

☆行事内容やセンターの日常を、センター日誌 (<http://isumisato.exblog.jp/>) にてご覧いただけます。

これからの行事案内

4月 (2月1日から受付開始)

●タンポポや小川のいきものを観察しよう

9日(土)10:00~12:00 定員20名 雨天順延10日
センターの春のいきものたちを観察しよう!

持物:歩きやすい服装



●万木城の歴史と里山の自然観察

23日(土)10:00~15:00 定員20名 雨天中止
春の万木城周辺の歴史・自然を再発見
しましょう。

場所:スポット地区①万木の丘

持物:弁当、飲料、山歩きできる服装



6月 (4月1日から受付開始)

●岩船で磯のいきものを観察しよう

4日(土)9:30~12:30 定員20名 雨天中止
磯にはどんないきものがいるかな?
観察しよう!

場所:いすみ市岩船の磯

持物:飲料、水の中で履く靴(サンダルや長靴、かかとの出ている靴は不可)



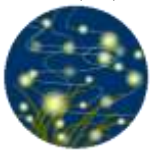
●ホタルの里でホタルを見よう 雨天中止

5日(日)18:30~20:00 定員20名
※ホタルの発生状況により日程変更有
ゲンジボタルの集団発光を、山田・ホタル
の里で観察しよう!



●センター内小川でのホタル観察 ① ②

11日(土)・12日(日)19:15~20:00 定員20名
雨天中止
ゲンジボタルが今年もセンターの小川
で見られるかな?
持物:特になし



8月 (7月1日から受付開始)

●ミニプログラム・スペシャルウィーク‘さとの夏遊び’

6日(土)~12日(金) 当日受付
虫採り、ガサガガ(水辺のいきもの採り)
水鉄砲等、さとの夏遊びをしましょう!

持物:飲料、帽子などお問い合わせ下さい



●トンボの沼のトンボを見に行こう

20日(土)9:00~11:30 定員20名 雨天21日
チョウのように飛ぶチョウトンボなどを探しに行きましょ
う!

持物:虫採り網、飲料、帽子



5月 (3月1日から受付開始)

●米作り1・田植え体験をしよう 小雨決行雨天中止

1日(日)9:30~14:00 定員30名
秋の収穫への第一歩。裸足で田んぼに入り、自分の
手で苗を植えよう!

参加費:100円

持物:弁当、飲料、着替え



●山田の穴堰と旧家の歴史を訪ねる小さな旅

21日(土)10:00~13:00 定員20名 雨天22日
珍しい穴堰と鍾乳石、山田の旧家、郷土資料館を訪
ねてみよう!

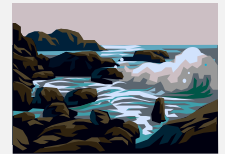
持物:山歩きできる服装、解散後持参昼食可

●太東の岬で海辺の自然を観察しよう

28日(土)10:00~12:00 定員20名 雨天29日
太東の岬周辺を歩いて、海辺の自然(植物・地質など)を観察しよう

場所:太東ハイキングコース周辺

持物:飲料、歩きやすい服装

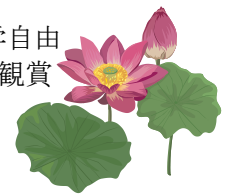


7月 (5月1日から受付開始)

●ハス観賞週間

5日(火)~10日(日) 随時 見学自由
日の出と共に開花するハスの花を観賞
しましょう

随時ミニツアー開催



●海辺の植物観察

23日(土)9:00~11:30 定員20名 雨天24日
日本で最初に指定された天然記念物「太東海浜植物
群落」に行きます

持物:飲料、帽子



●夏の星座観察

30日(土)18:30~20:00 定員20名
※雨天時室内で開催



夏の大きな三角形など夏の夜空の星座観察を
しよう

持物:飲料、虫よけスプレー

8月6日(土)~12日(金)の期間中は
ミニプログラムを毎日開催します。
詳しい内容は開催時期が近くなってから、
館内掲示やHPでお知らせいたし
ます。
参加申し込みは、当日受付です。
ぜひご参加下さい。



センターの生き物たち



ニホンアマガエル/アマガエル科

オタマジャクシ・カエル

カエルといえば夏のイメージですが、オタマジャクシを含めると早春からその姿はみられます。

2月頃に産卵するニホンアマガエルは、3月中旬には既に孵化したオタマジャクシを水路や田で見ることができます。ニホンアマガエルも3月中旬には姿を現し、暖かな日にはクワックワツとその声が聞こえて来ます。また水の張られた田にはシュレーゲルアオガエルがやってきて、白い泡状の卵塊を畦に穴を掘り産卵します(3月～6月)。その後成体の姿は秋の終わりまでみられ、カエル達の活動期間は意外と長いのです。



キブシ/キブシ科

3月～4月に釣鐘型の淡い黄色の花を咲かせます。ひとつひとつの花は小さいですが、枝の各節から垂れ下がる様に花を咲かせるので、まだ花の少ない時期にはよく目立ちます。花の後にサクラの葉に似た葉が出ます。

果実は楕円状の球形で始め緑色ですが、7月～10月に黄褐色に熟します。また果実にはタンニンが含まれ、昔はお歯黒に用いたそうです。名前の由来は、ヌルデの虫コブから作る染料の五倍子(ふし)の代用の木だから木五倍子(きぶし)になったという説があります。

いすみ楊枝 —千葉県伝統工芸品—

センターでは、「いすみ楊枝」を県内外に広く紹介するため、毎月高木守人氏に実演をお願いしています。

日時 毎月第3日曜日(9:30～16:00)

場所 ネイチャーセンター

講師 高木守人氏

参加料 材料費など実費いただきます

内容 楊枝・花入れ・茶杓作り など

編集後記

本号の原稿作成中に大地震がおり、大津波も発生しました。さらに原子力発電所も大きな被害を受けました。未曾有の大災害となり、被災し亡くなられ方々、避難されている方々に、心よりお悔みとお見舞いを申し上げます。

千葉県でも津波により多くの人命や財産が失われ、液状化による被害も生じました。さらに、被災地をはじめとするガソリンなどの燃料不足、地域的な計画停電の実施により、市民の日常生活にも支障が出ています。

自然災害は避けては通れないものですが、今回の地震のあまりの破壊力には言葉を失います。自然との付き合い方を改めて考えてしまいました。 所長

行事への参加申し込み、お問い合わせは、電話(0470-86-5251)、ファックス(0470-86-5252)、または、直接センター事務室にお申し出下さい。定員のあるものについては、定員になり次第締め切らせていただきます。あらかじめご了承下さい。全ての行事はネイチャーセンターに一度集合してから移動します。

* eメール可(メールアドレス: senta-sato@isumi-sato.com(すべて半角小文字です))

* 行事申し込み後、都合によりキャンセルする場合は必ず早めにセンターまでご連絡下さい。

◆ ◆ ◆ 利用案内 ◆ ◆ ◆

休館日: 毎週月曜日(月曜日が祝日の場合はその翌日)、12月29日～翌年1月3日

開館時間: 9:00～16:30、入館料: 無料

※当施設のご案内や解説などを希望される団体は、2週間前までにお申し込み下さい。